



C O N T E N T S

COMトーク Vol. 1
日本の街は駐車場が少なすぎる
佐々木かをり 2

VISION
中心市街地活性化法で高まる
駐車場整備促進の動き 8

NEW Line up
ELパーキング
90度乗り込み型 9

ANOTHER PROJECT
駐車設備リニューアル
のご提案 メンテナンス部 14

TREND
施工写真を記録する
デジタルカメラ 15

COMトーク Vol. 1

日本の街は駐車場が少なすぎる

佐々木かをり

2

アメリカに行くといつも感じのですが、いろいろな施設には必ず大きな駐車場があります。それに、法律でも決められていると思うのですが、スーパーマーケットなどでは入口に一番近い場所に体の不自由な人たちのための駐車スペースが必ず確保されています。また、ある大企業では優秀な社員を表彰するのに、広大な駐車場の中から会社のドアに一番近いスペースを優先的に与えているとも聞きました。車社会ですから、駐車場そのものが社会的かつ倫理的な姿勢を示す尺度になつていて気がします。

アメリカでは企業も生活者も様々な国籍や肌の色、宗教、家庭環境の人たちがいることが大前提で日々生活しています。国民性とか、優しさとかの違いではなく、もともとの文化的背景が違うこともあるのでしょうか。

それにも日本は駐車場が少なすぎます。仕方なく路上に停める人もいる。好き好んでリスクを負う人はいませんはずです。駐車禁止を取り締まるだけでなく、土地をどんどん活用して駐車場を作ってくれればいいですね。そんな時、土地が狭いですから立体や地下駐車場が活躍するのでしょうか。



●佐々木かをり●

70以上の言語に対応するコミュニケーションのコンサルティング会社、ユニカルインターナショナルを28歳の時に設立。同社代表取締役。CBSドキュメントのキャスターもつとめる。著書は「ギブ&ギブンの発想」(ジャストシステム)など多数。一児の母親。

力がらの解放、破壊 そしてインターフェース

「新しい建築」を追い求めた軌跡

FRONT LINE

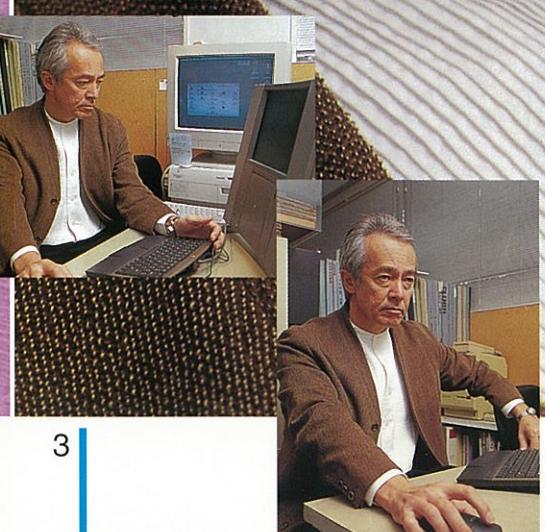
Edward Suzuki

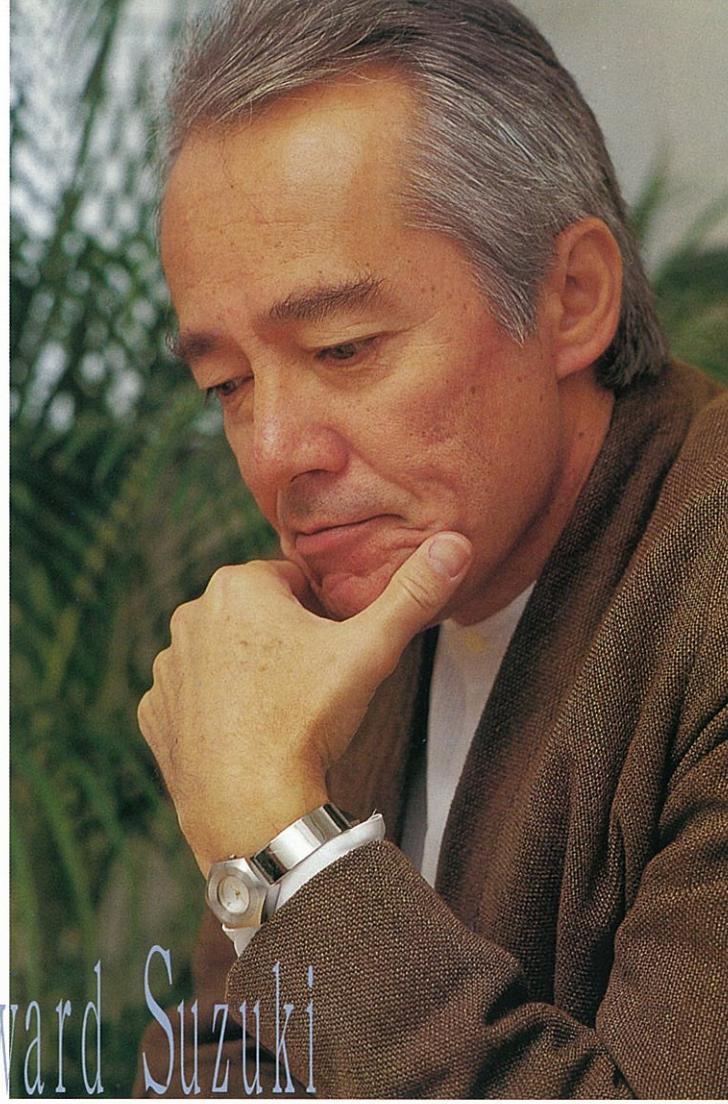
建築家インタビュー

鈴木エドワード

端正な容姿と穏やかな物腰、そして、銀幕から抜け出たかのように洗練された紳士が、建築家・鈴木エドワード氏の印象だ。

しかし、青春時代からの建築家としての軌跡をうかがっていくと、どうもそのスタートは優等生然としたものではなかったらしい。それまで、当たり前とされてきた建築界の常識に反旗を翻し、これまで試みられなかつた新しい建築を目指した数々のアイデアとそのエピソードは、氏が相当な熱血漢であることを象徴している。そして、その思いは年輪を経るごとに、さらに強固なものとなり建築作品に結実させている。同氏の最近のテーマは「インターフェース」。今回のインタビューでは、その考え方、そしてその発展・進化についても十分に語ついただいた。





Edward Suzuki

今回は鈴木エドワード氏が建築を志した学生時代から、同氏の追い求めてきた作品のテーマに沿って回想し語つていただいた。話はアメリカ、ノートルダム大学在学中に実施されたローマでの特別カリ

重さや力に象徴される圧縮ではなく技や知恵による建築を目指した

僕の大学の卒業設計のテーマは「空飛ぶ家」というものだったんです。気球の原理にのっとった球体の家を、それと似たような球体に浮力を付けて、空に飛ばしてやるというものなんですね。

も、しっかりと自分の構造を保ちながら生きていくという、すばらしく効率の良い建築なのです。これらは圧縮ではなく、テンション、引張りによって成立している建築です。したがって資源、材料、エネルギー、またはマンパワーや時間というものを最小限に抑えた形で出来上がるという、非常に効率の良い構造体なのです。そういう意味で単にイメージ的に軽いというだけ大体、我々建築家は構造専門家以外は、普段設計している建物の重さなど、あまり

気にしたこともないですし、ましてや、そきいていくという、そんな無いんですね。もちろん構造家はそのへんはしっかりとおさえ数字を出しますけれど、普通の日常建築をやっている人たちはそんなことは気にもしない。しかし、やはり地球に優しいこ

キュラムにおける、人生の転機ともなったヨーロッパ体験。そして、アメリカに戻つてからの卒業設計のテーマである、「空飛ぶ家」創作までのエピソードからスタートしていただく。

なぜこういうテーマになったのか、といふことなのですが、僕はアメリカのノートルダム大学で5年間建築を学びましたが、そのうち4年目のクラスがそつくり全部、イタリアのローマに移植されたのです。

ながら、世界中飛び回りながら、生活が成り立つことがある程度可能になっていきます。ですからそういう道具に多少頼りながら、空飛ぶ家というのを提案し、それを通じて人間のライフスタイルを変えてあげられるんじゃないとか。特に人口が増加していく中では、土地といふ地の財産を個人所有するのではなく、みんなでそういう財産、資源を共有しなければいけないので、それが実現すれば、地球といふ理由は本当に空飛ぶ家が実現できたならどんなに楽しいだろうか、という遊び心もあって提案したわけです。

二つの理由としては、我々人間の生活は、ほとんどその時の政治、経済、社会のしがらみに左右されているわけで、大きな意味でそういう圧迫から開放してあげたいということ。もう30年近く前頃から、現在我々が使っているようなテレコミュニケーションが始まつてきていて、必ずしも一ヵ所で人間が住んだり、仕事をする必要はなくなっています。動きながら、移動し

ところがモットーになつていているこの時代においては、本当の意味で軽い、効率のいい建築を目指さないと、私たち建築家が本当に「地球に優しい」ことをしているのかと、そのような力に象徴されることはあります。これらはある日突然、敵に突破されてしまうのですが、どうしてそういうことになつたかというと、そのような力に象徴されるものに対して、敵

でも、そんな提案をしたおかげで、最初の大学でのファイナルプレゼンテーションでは、「お前、ふざけんじゃないか」と言われました。「そんな馬鹿なことをやつてるなら退学だ」なんて脅かされたりしました。

逆にそれが刺激になつて最後まで追求したのですけれど、結局自分でも大変納得のいく満足な作品ができ、プレゼンテーションが終った時は、教授、学生全てがスタンディングオベーションでした。しかし、構造とデザインの両部門で賞が与えられるのではが、結果は両部門で2位に落とされました。でも、そんなことで日本に帰つてきました。

そんなこともあります。しばらくは「建築なんかやってられるか」という気持ちで、環境運動などに打ち込んだ時期もあつたんですけど、やはり最終的には建築が好きで新しい建築を目指すべく、また戻つてきました。



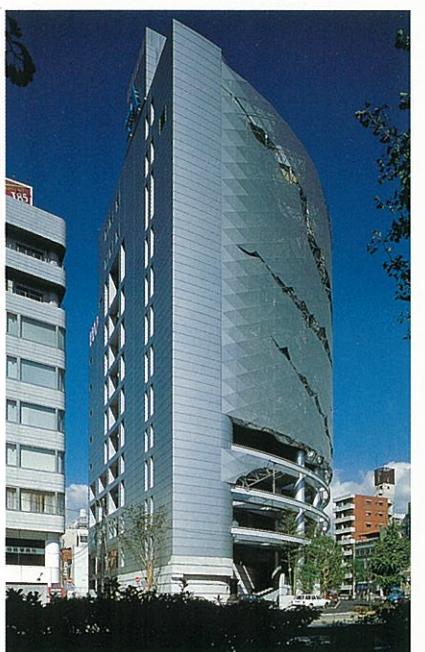
写真上：山形県南陽市にあるJR東日本・赤湯駅舎。95年度の通産省のグッドデザイン賞にも輝いた。そのほか、やまがた景観デザイン賞・同友会賞、鉄道建築協会第22回業績部門 奨励賞を受け、98年には公共建築賞特別賞も受賞した。駅全体に鉄道と街とのインターフェースの役割を与えている。写真下：秋田県大曲市にあるJR東日本・大曲駅舎。



二つの理由としては、我々人間の生活は、ほとんどその時の政治、経済、社会のしがらみに左右されているわけで、大きな意味でそういう圧迫から開放してあげたいということ。もう30年近く前頃から、現在我々が使っているようなテレコミュニケーションが始まつてきていて、必ずしも一ヵ所で人間が住んだり、仕事をする必要はなくなりつています。動きながら、移動し

ながら、世界中飛び回りながら、生活が成り立つことがある程度可能になっていきます。ですからそういう道具に多少頼りながら、空飛ぶ家というのを提案し、それを通じて人間のライフスタイルを変えてあげられるんじゃないとか。

特に人口が増加していく中では、土地といふ地の財産を個人所有するのではなく、みんなでそういう財産、資源を共有しなければいけないので、それが実現すれば、地球といふ理由は本当に空飛ぶ家が実現できたならどんなに楽しいだろうか、という遊び心もあって提案したわけです。



写真上：大宮新都心開発のJR東日本・「埼玉新都心駅（仮称）」のモデル。
写真左：東京・麻布十番交差点にあるテナントビル「ジユールA」。

実は当時の学長がイタリア系アメリカ人で、昔からそういうプログラムを夢見ていて、我々の4年次の時にそれが実現されたわけです。これは現在でも、大変好評なプログラムとして続けられています。

1年ローマに暮らしながら勉強をして、メインのカリキュラムは、フリータイムがあれば勝手にヨーロッパ中を旅することができます。それは例えば右だ

とか、鉄筋コンクリートとか、最近では鉄骨という、そういう固体を積み上げていく圧縮建築なんですね。エジプトのピラミッドから、ギリシアのパルテノン神殿、ローマのコロシアムなどを見れば明らかのように、全ての建築を続けています。それは例えれば右だけ「空飛ぶ家」という形で実を結んだというわけです。

もちろん、ローマ滞在がきっかけであつたわけですから、古代ギリシア、ローマ、エジプト時代から我々は相変わらず圧縮に頼る建築を続けています。それは例えれば右だけ「空飛ぶ家」という形で実を結んだというわけです。

つまり、重さや力に象徴される圧縮建築ではなく、どれだけ軽く、しかも効率のよい構造体ができるかという、技とか知恵に頼る建築を目指して提案したかったといふのが「空飛ぶ家」の理由だったのです。

例えばクモの巣は、ほとんど存在感が無されたわけですが、

ついで、重さや力に象徴される圧縮建築ではなく、どれだけ軽く、しかも効率のよい構造体ができるかという、技とか知恵に頼る建築を目指して提案したかったといふのが「空飛ぶ家」の理由だったのです。

例えばクモの巣は、ほとんど存在感が無されたわけですが、

地球というグラウンドを必要に応じタイムシェアリングしていなければ

でも、そんな提案をしたおかげで、最初の大学でのファイナルプレゼンテーションでは、「お前、ふざけんじゃないか」と言われました。「そんな馬鹿なことをやつてるなら退学だ」なんて脅かされたりしました。

逆にそれが刺激になつて最後まで追求したのですけれど、結局自分でも大変納得のいく満足な作品ができ、プレゼンテーションが終った時は、教授、学生全てがスタンディングオベーションでした。しかし、構造とデザインの両部門で賞が与えられるのですが、結果は両部門で2位に落とされました。でも、そんなことで日本に帰つてきました。

そんなこともあります。しばらくは「建築なんかやってられるか」という気持ちで、環境運動などに打ち込んだ時期もあつたんですけど、やはり最終的には建築が好きで新しい建築を目指すべく、また戻つてきました。

